

# 北海道地震津波の記録

## 「海が吠えた日」より

津波に母をなくして

宮田 故 前田一良

昭和二十一年十二月二十日の夜は、星明りの静かな夜であったように思います。当時私の家族は両親と妹弟三人の六人家族でした。静かな夜だったので皆よく眠っていました。突然何の前ぶれも無かったように思います。急にガタガタと大きな音がして眼がさめ、これは今までにない大きな地震やないかとあわてて立って歩こうとしましたが、上下に揺れて歩けないので柱につかまって立っていました。四〇五分で揺れが弱くなったので、母と一緒に家の裏がすぐ浜やったんで浜に出て、潮の引き具合をみたけれど、その時は別に変わった様子もなく五分か七分ぐらいで急いで家に帰ったら、妹や弟はもう逃げておらなんだようだった。

寒いので上着を着ると同時に拵方の朋やんの声と思うが「津波が来るぞう！」と言いなながら走って行く声聞き、これはいかんと思ひ逃げるのに外へ出ようとしたら、もう潮が来ていて、見る間に腰胸と水に浸かっていった。

父と母は、その時はもう二階に上っていて、「もう逃げる間が無い、早よう二階にあがってこい」と叫ぶので、階段をあがると同時に階段が水に浮いてはずれたように思う（昔の家の階段は段梯子と言って取りはずしができた）。後で聞いた話やけど、妹や弟は、後から潮に追いかけれられないから海蔵寺に逃げていったとのこと、逃げるのが早かったら逃げられるよ

うな潮の早さやったのに、真暗がりでも見えんがようよう手探りで窓のところまでゆく。もう家の中にいて家が倒れて来たら下敷きになると思ひ、母の手を持って先に屋根に出て、「早よう出てこい！」と叫んで引張ると同時に、裏の方（浜の方）からドスンという大きな音とともにメリメリと柱の折れる物凄音と同時に、家が前の方に倒れていき、しっかり握っていた母の手を離してしまひ何か押し付けられた。何かに挟まれたように身動きが出来ない、息をすると潮水をゴクンと飲んだので、これはいかん潮水を飲まないように手の平で鼻と口を塞いだら、今度は息が出来なくなつて、からだは綿のようにフワフワとしたようになり、どこを見ても灰色か銀色のように見えて気を失っていた。

それからどのくらい、時が経ったか知らんけど、体が冷やーとしたと思つたら気が付いた。父や母はどないしたんかいなアーと思ひ、這い出して外に出たが暗くて何も見えない。そのうち、全身ビシヨ濡れやから寒くて、いても立ってもおれない。でも父や母は家の下敷きになって濡れているんやから凍つてしまふんやないか、早よう捜さんだらいかん！そのうち、うっすらとどうにか見えるようになってきた。倒れた自宅の窓の所にいたので「トトやん！」と呼んだらちようどその下で「ここやー」と言う声が出た。瓦をはいだら父がヒョカーと頭を出してきたので引張りだし「お母やんは？」と言つたら「この下で声が出た」と言うので下へ潜つていったけれど暗くて何も見えんし、壁土や柱の下敷きになつとるようで、手探りで壁土を取つたりしていると三度目ぐらいのゴウという込み潮でからだは潮につかたてズブ濡れとなり寒くておれないんで、弟が持つて逃げた着物と替えて戻つて来たら、父が誰かに手伝つてもらつて母を妙見さんに連れていってくれました。母は長時間、水に濡れていたの凍死してしまつたようでした。ただ手を当てると腹のあたりがかすかに温もりがあつたぐらいでした。

こんな地震や津波が無かつたら、まだまだ長生きできたと思ひます。あれから五十年、平穏な日々が続いていますが、いつか、また近い将来必ず起こるであろう災害に備えて、二度とあの悲惨な犠牲を繰り返さないよう心しなければと思ひ、子供や孫たちに時々話しております。